

# 人生ハンド仏句

第50号

H.18.5.1  
(毎月1日発行)

唱えるお題目を

住職 谷川寛俊

昔、NHKのテレビに「ウルトラ・アイ」という番組がありました。私達の目に見えない世界をウルトラ・アイ、つまり科学の目で見るというものでした。

ある時、ベートーベンの「運命」をネズミに聞かせたら一体ネズミにはどんな音に聞えるかと言う実験がありました。ネズミの耳に音をキャッチする電極をつなぎ、そしてあの有名な「ジャジャジャジャーン」という「運命」を聞かせたのです。驚いた事にネズミの耳にも、私達が聞くのと同じ「運命」が聞えていたのです。「運命」はネズミの耳にも人間の耳にもやはり名曲「運命」として聞えている。しかし聞えてはいるが、ネズミにとっては「運命」といえどもそれ

は単なる一つの音。その「運命」を聞いて、涙したり、励まされたりする事は決してない。「運命」を聞いて感動するのは、私達人間だけなのだ、という実験でした。

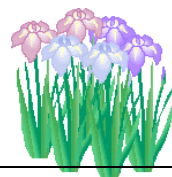
能楽の大成者といわれる世阿弥は、「観の体」と言う事を説きました。「観の体」とは、ものを見る主体、つまり自分自身の心という意味です。「心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞えず」と言う言葉があります。

人間とネズミの違いは、耳ではなく「観の体」、つまりその奥にある「心」にあったのです。

その心について、釈尊は如来寿命品第十六(お自我偈)では「転倒の衆生」と説かれています。転倒の衆生とは、自己中心的な生き方、考え方をする我々人間のことで、転倒の衆生の怖いところは、自分が「転倒の衆生」だということに気付いていないということです。

日蓮聖人は「体曲がれば影斜めなり」と説かれました。

編集・発行  
玉蓮山 真成寺  
編集部  
TEL・FAX (0765)22-2268  
メールアドレス  
kokorochanthk@ybb.ne.jp  
ホームページアドレス  
<http://www.geocities.jp/sinijoujitoiyama108/>



又日蓮聖人は、清澄寺の虚空蔵菩薩に「日本第一の智者になしたまえ」と祈られました。虚空蔵菩薩は「福德」と「智慧」の菩薩です。その虚空蔵菩薩に「福德」ではなく、「智慧」を祈られた日蓮聖人。長い修学の末、八万法蔵といわれる経典の中から、法華経こそ末法の私達の為に久遠の本仏が説かれた真の教えを明かされ、衆生救済の良薬であるお題目を私達に与えて下さいました。このお題目こそ「転倒の衆生」である私達を救う大良薬なのです。

「観の体」が曲がっていても、幸せも徳もありません。そんな転倒の衆生である私達を救う良薬が、お題目なのです。しかし良薬でも、ただ飾っておくだけ、心の中で思うだけでは何の効き目もありません。それは声に出して唱え、身をもって行じてこそ、初めてその効き目が出るのです。もっと真剣にお題目を「唱える」ことを大切にしましょう。

## 仏も昔は凡夫なり

